

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520234

研究課題名(和文) 明治大正期の日本文学における英米 cheap editions の受容

研究課題名(英文) A study in modern Japanese literature influenced by Western cheap edition novels.

研究代表者

堀 啓子 (Hori, Keiko)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：60408052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：尾崎紅葉、黒岩涙香を初めとする明治、大正期の作家がイギリスおよびアメリカで人気を博したcheap editions をもとに発表した翻訳、翻案作品について調査し、原作との比較研究を行った。尾崎紅葉に関しては単著『和装のヴィクトリア文学』(東海大学出版会、2012年)を上梓し、黒岩涙香や周辺作家の作品については、同じく単著『日本ミステリー小説史』(中央公論新社、2014年)において、イギリスやアメリカの作品が日本にもたらされた経緯とその影響についてまとめた。

研究成果の概要(英文)：During my research of Japanese authors' works of the Meiji and the Taisho Eras, especially those represented by Ozaki Koyo and Kuroiwa Ruikoh, it became evident that their masterpieces were influenced by Western cheap editions.

The part of the research that focused on Ozaki Koyo was published in June 2012 under the title: Victorian literature dressed in Japanese style. The study examining Kuroiwa Ruikoh's works was featured in the title of The History of Japanese mystery published in September 2014.

研究分野：比較文学

キーワード：比較文学 Bertha M. Clay 尾崎紅葉 黒岩涙香 Charlotte M. Brame

1. 研究開始当初の背景

明治大正期の日本の文学は、英米で出版され cheap editions と総称される廉価版小説から多大な影響を受けている。同時代に発表された名作の中には、そうした英米の原書をもとにし、それらの一部あるいは大部を改案し、日本人読者の嗜好に合うかたちに直して発表されたものも少なからずあった。しかし、それらがすべて、改変された翻訳や翻案であることを明記していたわけではない。原案があったという事実を伏せ、原著名や原作者も明記しないまま発表して人気を博したものも多かった。

それは、そうした事実を隠ぺいし、意図的に糊塗しようとしたためというよりは、むしろ、原書の作者が有名作者である場合には原作者に対する敬意から、敢えて公表しなかったという場合が多い。いっぽうで無名の廉価版小説作家の作品を原案とした場合には、それらが読み捨て本として位置づけられていたことを理解したうえで、原書を日本の読者に正式に紹介するために取り上げたのではなく、単に自作の構想の原拠を借りたという意識に過ぎず、原作を公表する意味を見出さなかったためであった。

とりわけ廉価版小説を原案としたケースは、そうした同時代作家の意識に呼応するかたちで、研究史上でも看過され、問題化されることも少なかった。ただ、潜在的に原作を持つとされる同時代作品は相当数にのぼると考えられることから、それらに焦点をあてることでこれまで見えなかった近代文学生成の手法の一部が明らかになると考えられる。

そのため報告者は、文学史にうもれてきたそうした作品背景を掘り起し、同時代の日本の作家が cheap editions から何を得て、どのようなかたちで作品を創成したのかに焦点をあて、近代小説の手法を確立したのかという経緯を明らかにしたいと考えた。これが本研究を開始した背景である。

2. 研究の目的

明治から大正にかけて、日本には多くの欧米の文学作品がもたらされてきた。それらには、それ以前の日本の作品には見られなかった数々の斬新な要素が含まれており、外国語のできる文士たちはこぞって入手し、原書のまま読むことで取り入れた構想や視点、文体の工夫などを自らの作品に投影したのである。

だが従来、こうした外国作品の受容に関する研究は、原作が名だたる文豪の名作であるものに集中し、無名の作品との関わりについてはほとんど論じられてこなかった。その理由としては、以下の点が挙げられる。

(1) 無名の作家の作品は多くが廉価版として出版され、それゆえに文学青史

では重視されてこなかったこと。

(2) 廉価版ゆえに装丁も簡易でダメージを受けやすく、読み捨て本という認識ゆえに保管所蔵されず、現在では多くが佚書となってしまっていること。

(3) 上記(1)(2)の理由から、それらの作品を体系的に網羅した出版リストがなく、個々の作家や叢書的全貌を見極めるのが極めて困難であること。

の三点である。また日本ではこうした cheap editions はもとより、周辺資料さえほとんど現存せず、事実上、調査が不可能というのが現状である。

じつは、これらの cheap editions は廉価多売の原則により、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて英米本国の出版社のドル箱路線であった。すなわち、無名であるがゆえに、作品そのもののむきだしの魅力が唯一の評価基準とされ、結果的に絶大な人気を支えたのは個々のストーリーテリングの面白さ、読者を誘引する文体の力である。それらが国境を越えて日本の文士を惹きつけたのは当然であり、巧みに換骨奪胎された翻訳や翻案が時代を越えて現代まで読み継がれてきたのも首肯できる。ならば、こうした cheap editions がどのようにして日本の文士に受け容れられ、自家薬籠中のものとして新たな日本の名作へと創り変えられていったのかを調査することが、日本の近代作家がここで獲得した文学の生成手法を浮き彫りにし、新しい作品生成過程を明らかにすることにつながると思われる。

この背景に関し、たとえば徳田秋聲は『光を追うて』(1938年)の中で、明治二十年代半ば、等(ひとし)という青年が師と仰ぐ文士と初めて出会う場面をこう描いている。

それから原書を一冊持つて来て、そのうちの数頁をもぎ取り 等の前において

「この短篇の筋だけ取つて、成るだけ面白く日本風に翻案して見ないか(下略)」
等が手に取つて見ると十頁ばかりの短篇で、二三箇所朱線を引いたところがあり、末尾に五月十一日読過と誌してあつたが、勿論アメリカの赤本であつた。

同書が自伝的小説であり、こののち等がこの「アメリカの赤本」すなわち米国版 cheap edition をもとに作った短編で初稿料を手にするエピソードが作者自身の体験と一致することに鑑みると、cheap editions はこうして、日常的に文士たちに自作の下敷き・下絵として簡便に扱われていたことが推される。そして、こうした cheap editions をもとに発表されたことが判明している作品の多くは、同時代に大変な人気を博し、現代でも名作の誉れ高い金字塔となっている。

報告者の、この前段階としての研究は幸い

にいくつか実を結び、なかでも尾崎紅葉の『金色夜叉』の原著を特定した拙論(『文学』岩波書店)は、『読売新聞』夕刊の一面(2000年11月11日)で報じられた。また、「近年、堀啓子氏によって、『不言不語』や『金色夜叉』における原本(藍本)の確定と、その援用の実態が具体的に明らかにされたことは記憶に新しい」(宗像和重『徳田秋聲全集 26巻・解説』八木書店 2002年)や「雑誌『季刊文学』などで詳細な論文を発表し、紅葉がストーリーと人間関係の構築に関して欧米の同時代小説からヒントを仰いだことを具体的に指摘した」(島内景二『文豪の古典力』文芸春秋 2002年)などのご評価を戴いたほか、『日韓近代小説の比較研究』(慎根緯 明治書院 2006年)、『美女とは何か』(張競 角川学芸出版 2007年)、『英文学の地下水脈』(小森健太郎、東京創元社 2009年)など、他分野やアジア各国の研究者諸氏の文献でも言及して戴いている。

また、欧米の学会でもこの研究はご評価戴いており、The Society for the History of Authorship, Reading & Publishing 2007の学会発表(於 Univ of Minnesota)での研究発表は優秀発表として 'deserve special mention for their excellence' として学会誌 (SHARP NEWS Autumn 2007) でご報告戴き、これを受けて committee より招請を受け、2008年9月の同 Copenhagen 学会(於 Univ. of Southern Denmark)にて研究発表を行っている。

よって、このたびの研究は、

- (1) cheap editions をもとにした明治大正期の翻訳翻案の原著を措定する。
- (2) それらが、どのような意図で、どの段階まで原作を模しているか系統的に整理する。
- (3) その調査結果を踏まえ、同時代の日本の文士たちがどのように外国文学を換骨奪胎し、独自の近代小説としてのスタイルを確立していったかを分析する。

という三段階の研究工程を経て、無名作品特有の魅惑的なストーリー展開と異国情緒が、いかに文士の独自世界・日本人の心的態度と融合され、より魅力的な作品生成を可能にしたのか、同時代読者の受容や嗜好とともに明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

国内および国外での資料収集や現地調査を行い、並行して比較研究を行った。

- (1) イギリス及びアメリカの図書館に赴き、可能な限りの cheap editions を現地で確認し、複写や購入の可能な資料はできるだけ入手した。また、cheap editions の研究は、欧米でもまだ新規の分野であり、口頭で伝えられる情報も多いため、他国の研究

者との情報交換も密に行った。

- (2) 国内外における作家に関連する土地に赴き、生家や地元の文学館に残される草稿や書簡などの資料を確認し、作品創作の背景に関連すると思われる内容を調査した。

報告者の研究はこれまで、Charlotte M. Brame という一作家に焦点を当てたものであった。そのため、本研究では従前から行ってきたこの研究工程を引きついでその範囲を広げ、原作者を限定することなく cheap editions の内容が酷似する明治期の作品を探り、両者を照合するという方法を以て研究をすすめた。そのため、今回は日本側の翻案作品から逆に cheap editions 中の原著を辿るという方式に切り替え、作業に着手した。

具体的には、cheap editions をもとに手がけた翻案があるとされ、同時代好評を博した森田思軒、黒岩淡香、須藤南翠、尾崎紅葉らの翻訳や翻案の原著を措定し、あるいは原作が判明している作品については比較検証を行った。

研究の工夫としては、調査対象とする cheap editions のシリーズを限定することで、不用意な研究作業の拡散を避け、混乱を減じるように努めた。そのため、丸善本店に所蔵される当時の輸入書籍目録でも確認されるように、当時日本に輸入されていた、ニューヨークの Munro 社の The Seaside Library と Lovell 社の Lovell's Library という両叢書を中心に調査をすすめた。タイトルの照合には、報告者がアメリカの研究者から直接提供を受けた両シリーズの総目録を用いることで、時間を節約しえた。

こうした英米の研究者諸氏や cheap editions 作者のご子孫が、報告者の研究の理解者、奨励者であり、こうした日本の翻案の生成過程に興味を示されている彼らは協力を惜しまれず、前述の目録を初め、個人所蔵の資料についても色々ご提供戴いている。とりわけ、cheap editions 研究の第一人者である Randy Cox 教授(Professor emeritus at St. Olaf college)、University of Minnesota の Karen Hoyle 博士および、一世を風靡した cheap editions 作家の一人 Charlotte M. Brame 研究の権威である Gregory Drozd 氏 (Chief Executive of Voluntary Action Hinckley and Bosworth) に、報告者の研究が抛るところは大きかった。

なお、本研究の最優先事項となる原書資料の確認には、特に現地の研究者諸氏の協力を仰いだ。現地での資料調査に関して、事前にネット検索では知りえない情報(たとえば資料の損傷状態、複写もしくは接写の可否など)の提供を受けることで、接写の準備なども滞りなく進められ、限られた滞在期間となる現地での時間を有効に活用しえた。また資料が特に "fragile" (壊れやすく、複写不可)とされた場合には、古本も入手した。こうし

た cheap editions は、需給の関係で高額になり、一般の古本市場に出まわる確率も低かったため、コレクター間で伝わる情報も活用した。

4. 研究成果

このたびの研究成果については、発表した著書と論文についてそれぞれ整理して述べたい。

- (1) 著書(単著)を二冊上梓した。2014年に中央公論新社より出版した『日本ミステリー小説史』(全272頁)および、2012年に東海大学出版会より出版した『和装のヴィクトリア文学』(全246頁)である。

に関しては、cheap editions をもとにした同時代作品の中で、ミステリー(当時は探偵小説と称された)に分類された作品が多いという事実をまとめたものである。たとえば、黒岩涙香や森田思軒らの作品にそうした傾向が多く認められ、彼らのミステリー分野での活躍が、のちの日本におけるミステリー作家のみならず、谷崎潤一郎や佐藤春夫、芥川龍之介らに指針を示し、ひいては後代の江戸川乱歩らの作家を生みだした素地をつくったという背景を体系的にまとめたものである。すなわち報告者は本著の中で、cheap editions が、ひとり読み捨て小説的なジャンルのみならず、後の日本近代文学全般にさまざまな意味で影響を与えたという結論に達したものである。

に関しては、明治の作家、尾崎紅葉が明治二十八年に発表した『不言不語』について論じたものである。『不言不語』は、発表当時より、『源氏物語』風の美文が注目された純日本風の雅文体の作品であったが、同時に日本離れした探偵小説的な構想が話題を呼んでいた。そして翻案と見做されつつも、その原作が長らく不明とされてきた作品である。報告者は、研究の段階でその原作が Charlotte M. Brame 著の作品であることを措定しており、本著のなかで両者の詳細な比較検討を行って、その原作が確実に『不言不語』の原作であることを特定した。そして、同時にその原作である *Between Two Sins* の全文訳も併載した。

- (2) 雑誌論文は、連載の翻訳も含め9本発表した。
の『明治中期の翻案小説』は、明治の二、三十年代において洋書の cheap editions がどのようにして

日本にもたらされ、同時代文士がいかにしてそれらを手に入れるにいたったかの経緯を述べたものである。

の『廉価版小説の翻訳への意識』は、従来の研究の中でほとんどふれられることのなかった Sexton Blake というイギリスの cheap editions のシリーズもののヒーローについてまとめたものである。現在でこそ無名だが、大正初期の雑誌『新青年』などでは翻訳として重要な位置を占めており、その後の探偵小説の発展へ寄与した点を主軸とした。

の『明治翻訳界のフロンティア』は、黒岩涙香が明治三十五年に発表した『椿説花あやめ』という作品のなかで、Bertha M. Clay(Charlotte M. Brame)の原作の *Her Mother's Sin* をいかにして翻案したかを検討し、原著に登場する二人のヒロインを如何にして日本の女性へと変換し、書き分けたのか、ここに至って変化した文体に注目しつつ、その描出の手法を検証した。

からは、Charlotte M. Brame の代表作である長編小説 *Dora Thorne* を数年にわたって分載している翻訳である。同作品には Charlotte M. Brame の特徴がすべて凝縮されており、日本にいち早く紹介された作品であることに鑑みると、多くの同時代文士がこの作家の作品に魅了され、次々に自分の作品の原著として求めた背景が浮き彫りになると考えられる。この完訳のあかつきには、その特徴が明らかになると考えられるため、分載の翻訳を積み重ねている段階である。

このほか、学会発表でも本研究の内容を報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

堀 啓子、明治中期の翻案小説、日本比較文学会東京支部研究報告、査読無、第11号、2014、pp46-51

堀 啓子、廉価版小説の翻訳への意識、日本近代文学、査読無、第89集、2013、pp187~192

堀 啓子、明治翻訳界のフロンティア、文学(岩波書店)、査読有、第13巻・第4号、2012、pp40-55

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その8) 東海大学紀要 文学部、査読無、第102 輯、2015、pp149 - 154

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その7) 東海大学紀要 文学部、査読無、第101 輯、2014、pp144 - 150

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その6) 東海大学紀要 文学部、査読無、第100 輯、2014、pp177 188

取得状況(計 件)

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その5) 東海大学紀要 文学部、査読無、第99 輯、2013、pp151 - 162

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その4) 東海大学紀要 文学部、査読無、第98 輯、2013、pp69 82

〔その他〕

堀 啓子、執筆ノート、三田評論、1184、2014、p66
HORI, Keiko、letters、Dime Novel Round-Up、No.738、2012、p219

堀 啓子、Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その3) 東海大学紀要 文学部、査読無、第97 輯、2012、pp21 32

6. 研究組織

(1)研究代表者

堀 啓子(HORI, Keiko)
東海大学・文学部文芸創作学科・教授
研究者番号：60408052

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

〔学会発表〕(計2件)

堀 啓子、明治文学の楽しみ：ミステリー―揺籃期の三人の慶應人、慶應義塾大学エルゴ―総会講演、2014年6月14日、於・慶應義塾大学三田演説館(東京都)

堀 啓子、明治中期の翻案小説、日本比較文学会東京支部例会、2012年9月15日、於・日本大学(東京都)

〔図書〕(計2件)

堀 啓子、中央公論新社、日本ミステリー―小説史、2014、272

堀 啓子、東海大学出版会、和装のヴィクトリア文学、2012、246